

《外国語科》

主体的に外国語を用いてコミュニケーションを 図ろうとする児童の育成 ～単元のゴール設定とチャレンジトークの工夫を通して～

那覇市立石嶺小学校教諭 徳元 忍

〈研究の概要〉

令和2年度、新設された小学校高学年外国語科は、外国語活動で慣れ親しんだ英語を総合的・系統的に扱う教科学習として、中学校外国語科への接続を図っていくことを重視している。那覇市が行ったアンケート結果では、外国語活動において英語に慣れ親しんだ児童の実態が伺えたが、本学級では単元終末段階において英語を用いてコミュニケーションを図ることに抵抗を示す児童の姿がみられた。これらの児童の実態を踏まえ、これまでのように英語に慣れ親しみ、かつ教科としてどのように中学校外国語科に接続を図っていくかが小学校外国語教育の今後の課題と捉えた。

本研究では、3つの資質能力の中の「学びに向かう力・人間性等」の涵養に関わる外国語科の評価項目「主体的に学習に取り組む態度」の育成に視点を持ち研究を行った。テーマを「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成」と掲げ“単元のゴール設定”と“チャレンジトーク”の工夫を通して学習の見通しや児童が英語表現に慣れ親しみ、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成について検証を行った。

その結果、単元のゴール設定を行うことで児童が学習に対して目的意識や見通しを持つことができ、主体的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の姿がみられた。また、チャレンジトークをもとに授業や学校外において繰り返し英語表現を用いることで外国語に慣れ親しむ児童の姿が見とれたと考察する。

外国語を用いて主体的に自分の考えや気持ちを 表現できる児童



外国語に慣れ親しんだ児童の実態

目次

I	テーマ設定の理由	21
II	研究目標	21
III	研究仮設	22
	1 基本仮設	
	2 作業仮設 (1) (2)	
IV	研究構想図	22
V	研究内容	
	1 主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童について	
	(1) 主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度	
	(2) 主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成	
	2 外国語科における単元のゴール設定と単元構成	
	(1) 外国語科における単元のゴール設定の工夫	
	(2) 外国語科における単元構成の工夫	
	(3) 単元のゴール設定における見通し・振り返り	
	3 英語表現に慣れ親しむ場の設定	
	(1) Small talk	
	(2) チャレンジトークの設定理由について	
	(3) チャレンジカード・チャレンジトーク	
VI	授業実践 (第6学年)	26
	1 単元の概要 (単元名・単元の目標) : 「I'm from Tokyo Japan」	
	2 単元の評価規準	
	3 指導と評価計画	
	4 授業仮説	
	5 本時の展開	
VII	結果と考察	27
	1 作業仮設(1)の検証 【結果】 【考察】	
	2 作業仮設(2)の検証 【結果】 【考察】	
VIII	成果と課題	30
	1 成果	
	2 課題	
	《主な参考文献》	

《外国語科》

主体的に外国語を用いてコミュニケーションを 図ろうとする児童の育成 ～単元のゴール設定とチャレンジトークの工夫を通して～

那覇市立石嶺小学校教諭 徳元 忍

I テーマ設定の理由

『小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編』（以下「外国語編」）では、近年外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされ、その能力の向上が一層求められている。小学校高学年においても、中学校との接続を図ることを目的とした、外国語科が教科として新設された。

那覇市が行っている『小学校外国語教育』のアンケート結果では、毎年約8割の児童が「英語の勉強は好き、楽しい」と肯定的に答え、これまでの外国語活動に本市が取り組んできた実践の成果がみられた。また、本学級が昨年度行ったアンケートにおいても「外国人と話せると面白い」、「将来の仕事や旅行で使えそう」などを理由に「英語の授業は好き、楽しい」と答え、児童が英語に慣れ親しんでいる様子がみられた。これらの結果から、英語に慣れ親しんできた児童の実態と外国語活動の成果を生かし、教科として中学校への接続を図る授業づくりを行っていくことが、今後求められていると感じた。

これまでの実践を振り返ると、ゲームを主体としたコミュニケーション活動の工夫や児童が英語に慣れ親しむことを目的とした授業づくりを行ってきた。しかし、単元終末段階において英語表現が十分に身に付かず日本語で活動を行う児童や、英語を使うことに苦手意識を示し、恥ずかしがる児童の姿が多くみられた。これらのことから、児童がやってみたいと思えるような課題の設定の工夫や、児童が英語を聞いたり・話したりする豊富なやりとりの場面設定が単元を通して十分に行えなかったためだと考えた。

そこで本研究では、児童が英語に慣れ親しみ、主体的に英語を用いてコミュニケーションが図れるよう、単元のゴール設定の工夫と英語表現に慣れ親しむための手立てとして、チャレンジトークを設定する。始めに児童の実態や発達段階をもとに単元終末において到達可能な課題設定（以下単元のゴール設定）の工夫を行い、単元に目的意識と見通しを持たせる。次に、新しい英語表現を既習の英語表現と交えて使用するチャレンジトークを毎時間の帯活動として設定し、児童が英語を用いてやりとりができる場の設定を行う。このように学習に対して目的意識や見通しを持たせ、学校や学校外において英語表現を繰り返し用いさせることで、英語に慣れ親しみ、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童が育成されると考え、本研究主題を設定した。

II 研究目標

主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童を育成するために、児童が学習に目的意識を持って取り組める単元のゴール設定と英語表現に慣れ親しむ場の設定を取り入れた授業改善を実践的に研究する。

Ⅲ 研究仮説

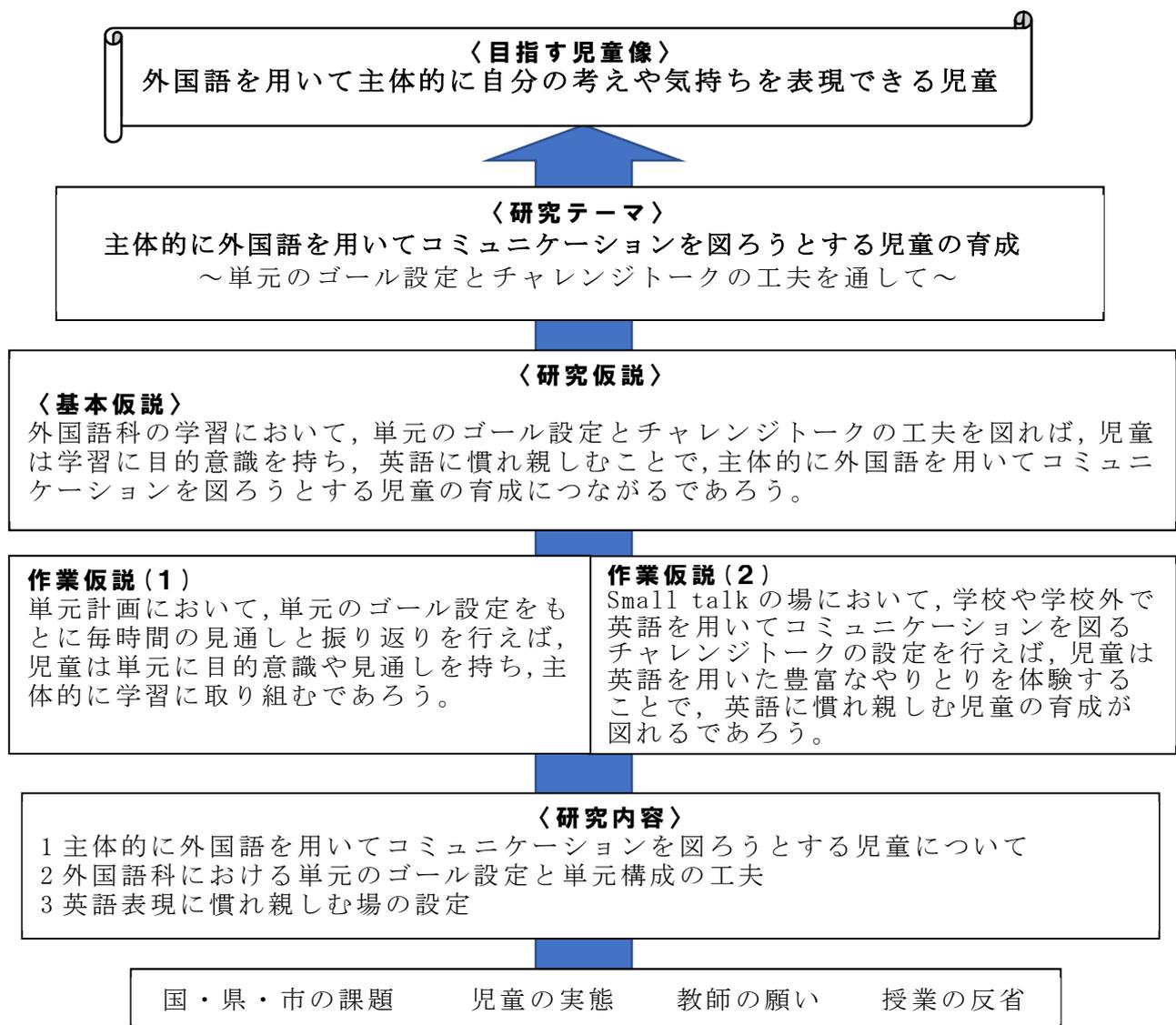
1 基本仮説

外国語科の学習において、単元のゴール設定とチャレンジトークの工夫を行えば、児童は学習に目的意識を持ち、英語に慣れ親しむことで、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成につながるであろう。

2 作業仮説

- (1) 単元計画において、単元のゴール設定をもとに毎時間の見通しと振り返りを行えば、児童は単元に目的意識や見通しを持ち、主体的に学習に取り組むであろう。
- (2) Small talk の場において、学校や学校外で英語を用いてコミュニケーションを図るチャレンジトークの設定を行えば、児童は英語を用いた豊富なやりとりを体験することで、英語に慣れ親しむ児童の育成が図れるであろう。

Ⅳ 研究構想図



V 研究内容与方法

1 主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童について

(1) 主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度

外国語編においては，“主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度”について「単に授業等において積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度のみならず，学校教育外においても，生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとするといった態度」と示されている。これは，改定前の目標である”積極的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度”から学びの幅を広げ，学校や授業以外の場においても学び続け，自ら英語表現を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度であると考えた。

(2) 主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成を図るためには，その土台となる英語に慣れ親しんだ児童の育成を図ることが重要となる。児童を英語に慣れ親しませるためには，聞く活動を十分にを行い，話す活動を段階的に取り入れながらコミュニケーション活動へと進んでいくことが望ましい。「インプット（入力）を十分に行ってからアウトプット（出力）させるようにする」，「アウトプットを急がせない」（小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック 2017）と示されている。これらのことから，本研究では，児童が英語に慣れ親しむため，単元を通して繰り返し聞いたり，話したりしながら英語表現を身に付けていくスパイラル的な活動を実践する。その土台を基に，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成を図っていく。

2 外国語科における単元のゴール設定と単元構成

(1) 外国語科における単元のゴール設定の工夫

単元のゴール設定とは，教師が児童の興味や関心，発達の段階にあった具体的な課題を設定し，目指す児童の姿を示すことである。外国語編「3 指導計画の作成と内容の取り扱い」においても“具体的な課題設定”について「教師が単元終末段階の児童に望む具体的な姿のイメージをもち，実態に応じて単元を見通した課題設定を示したものである。」と述べている。本研究では単元のゴール設定を，教科書 Blue sky にある Unit 1 の目標「外国の人に自己紹介ができるようになるろう」をもとに，本校の児童の実態と児童が学習に具体的なイメージが持てると考慮し「転校した外国の学校で仲良くなれる自己紹介ができるようになるろう」と設定した。単元のゴール設定の工夫を行うことで，児童は転校した外国の学校で仲良くなるという“目的”外国の学校に転校した“場面”そして外国の人に自己紹介をする“状況”が生まれ，学習への目的意識を高めることができると考えた。また，単元のゴール設定をもとに毎時間見直し・振り返りを行うことで児童が自分に必要な知識や技能等にも気づき調整を図る中で主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童が育成されていくと考える。さらに，単元の

ゴール設定を行うことで表のような効果も期待したい（表 1）。

表 1 単元のゴール設定の効果

①児童への効果	②指導者への効果
・学習への意欲や目的意識の向上 ・学習への見直しを持った学び合い	・単元を見通した授業の工夫・調整 ・児童の実態に応じた手立ての工夫

(2) 外国語科における単元構成の工夫

『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（以下「ガイドブック」）では、単元の構成について「単元を構成する際まず、大切となるのが、ゴールの明確化である。（中略）ゴールが決まれば、そこから逆算し、1時間ごとの目標を定め、活動を組み立てながら単元を構成していく。」と述べられている。本研究では、児童の実態に応じた単元のゴールを設定し、単元のゴールと結びつく言語活動（英語を用いた発表）の設定を行う。そして児童が課題解決に必用な英語表現に慣れ親しむため、繰り返し聞く・話す活動設定を行う（図1）。また、児童は教師によるデモンストレーションから単元のゴールやめあてを立て、単元を通して聞く・話す活動を繰り返し行う。このように、単元のゴールをもとに単元の構成を行い、児童が英語を聞く・話す活動を繰り返す中で、英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする主体的な態度が育まれていくと期待している。

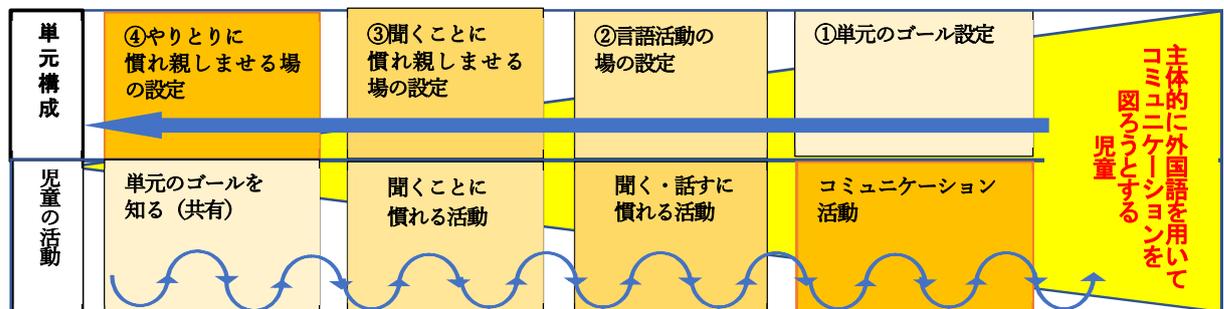


図1 単元構成のイメージ

(3) 単元のゴール設定における見通し・振り返り

『研修ガイドブック』では、外国語による主体的な学びを①コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定したり理解したりして見通しをもって粘り強く取り組むこと。②自らの学習やコミュニケーションを振り返り次の学習につなげることであると示している。本研究では、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成を図るため、単元のゴールを設定し、児童に学習の見通しを持たせる。そして、そのゴールにどれだけ近づけたかを振り返り、どのような英語表現が必要か等の見通しが図れるように「見とおし・振り返りカード」を導入とまとめの場面において実践していく（図2）。このように児童が毎時間、単元のゴールをもとに学習に見通しを持ち、授業の中で英語表現に慣れ親しみ、振り返りながら、調整を図っていくことで、外国語科による主体的な学びにつながると考えた。

那覇市立石嶺小学校

Grade 6 Class No.

見とおし・振り返りカード

Name _____

Unit 1 I'm from Tokyo, Japan.

【GOAL】外国の人に自己紹介ができるようになろう。

★今日の学習をふり返ってみよう。「聞く」「話す」「読む」「書く」ことの中から一番がんばったものに○をしよう！

時間	Date 月/日	聞くこと	話すこと [やりとり・発表]	読むこと	書くこと
1 ①	/				四線にアルファベット/英語を書こう。今日の【めあて】と【感想】を書こう。 *「できたこと」「できなかったこと」「がんばったこと」「次がんばりたいこと」 【Today's Goal】 【Comments】
		A B C D E F G			

図2 見とおし・振り返りカード

3 英語表現に慣れ親しませる場の設定

(1) Small talk

小学校高学年においては児童や教師が既習の英語表現を使ってコミュニケーションを行う Small talk の時間が推奨されている。この活動は指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることである。この活動を行うことで英語表現が定着し、対話を続けていくことに慣れ親しむことを目的としている。

(2) チャレンジトーク設定の理由について

本研究では、Small talk の時間を利用し、児童が既習の英語表現と新出の英語表現を用いてコミュニケーションを図るチャレンジークの活動設定を行う。本研究のテーマである“主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成”のためには、児童が十分に英語表現に慣れ親しむ授業作りが必要であると考え。しかし、移行期により、本来の授業時数（170 時間）が確保できなかったため、児童が十分に英語に慣れ親しんでいない現状があると考え。さらに新出の英語表現にも慣れ親しむためには、児童が授業や授業以外の場面でも英語表現に慣れ親しむ具体的な活動が必要であると考えた。そこで、児童が授業以外の場において、英語表現を用いてコミュニケーションが図れるチャレンジカードと授業の中で英語を用いてコミュニケーションが図れるチャレンジトークの設定を図る。これらの活動設定により、児童は繰り返し英語表現を用いることで英語に慣れ親しみ、テーマに迫る児童の姿がみられるのではないかと考えた。

(3) チャレンジカード・チャレンジトーク

本研究では、児童が授業以外の場面で英語を用いてコミュニケーションを図るチャレンジカード（図 3）と、授業の中で既習の英語表現を用いてコミュニケーションを図るチャレンジトーク（図 4）の活動設定を行う。チャレンジカードとはカードを使い授業で学んだ新出の英語表現を家族や友達に伝える活動である。（図 4 参照）チャレンジトークとは、児童が授業の中で、教師や友達の質問にチャレンジカードで使った英語表現を用いてコミュニケーションを図る活動である。これら 2 つの取り組みにより児童が英語表現に慣れ親しみ、英語が伝わる、英語が伝わった等の経験を積み重ねることで、テーマでもある“主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図る児童の育成”につながると考えた。

チャレンジカード 表
年組名前 _____
今日のチャレンジ
自分の名前を英語で伝えよう!
ヒント My から始まる

図 3 チャレンジカード

チャレンジカード 裏
今から英語で何かを伝えます。
1 英語は伝わりましたか?
Yes! NO
2 伝わった英語をそのまま書いて下さい。
()
サイン <input type="text"/>

チャレンジトークの取り組み
1 チャレンジカードの表にある課題を確認し、伝える相手を決める。
2 伝える相手にカードをわたし、既習表現 (How are you? 等) を交えながら課題の英語を伝える。
3 相手は、伝わった英語の内容をそのまま日本語で書き、サインをして返す。
4 チャレンジトークの時間にチャレンジカードで練習した英語用いてコミュニケーションを行う。(慣れてきたら児童対児童でも行いたい)
5 発表を聞いた児童は相づちや反応 (me too , really , oh, good 等) をすることで、英語が伝わったことを示す。

図 4 チャレンジトークの取り組み説明

VI. 授業実践（第6学年）

1 単元の概要

単元・教材名等	Blue sky 6 Unit 1 「I'm from Tokyo Japan.」 p10~19
内容のまとめ	「聞くこと」イ 「話すこと [やりとり]」イ 「話すこと [発表]」イ
単元の目標	知識及び技能 ○出身地、得意なこと、好きなもの、誕生日を表す語彙や表現について理解し、それらについて聞き取ったり、話したり、読んだり、する技能を身に付ける。
	思考・判断・表現等 ○海外の人と自己紹介し合うために、出身地、得意なこと、好きなもの、誕生日などについて、聞き取ったり、相手に伝わるように話したり、やりとりしたりする。
	学びに向かう力 人間性等 ○習ったことを積極的に用いて、相手や他者に配慮しながら、自分の言いたいことを伝えたり、相手の話を理解しようと努めたりする。また、活動の中で気づいたことや学んだことを次に活かそうとする。

2 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと	出身地、得意なこと、好きなもの、誕生日を表す語彙や表現について理解し、それらを聞いて具体的な情報を聞き取る技能を身に付けている。	相手について知るために、出身地、得意なこと、好きなもの、誕生日について紹介するまとまった話を聞いて聞き取っている。	相手について知るために、出身地、得意なこと、好きなもの、誕生日について紹介するまとまった話を聞いて概要をとらえ、必要な情報を聞き取るようとしている。
話すこと （やりとり）	好きなものをたずねたり答えたりする表現について理解し、それらを用いて、自分のことを伝え合う技能を身に付けている。	自分や友達の好きなこと・ものについて、伝え合うために、簡単な語句や基本的な表現を用いて質問したり、答えたりしている。	自分や友達の好きなこと・ものについて、伝え合うために、簡単な語句や基本的な表現を用いて質問したり、答えたりしようとしている。
話すこと （発表）	出身地、得意なこと、好きなもの、誕生日を伝える表現について理解しそれらを用いて、自分のことを伝える技能を身に付けている。	外国の学校で仲良くなれるために、出身地、得意なこと、好きなもの、誕生日、などを用いて工夫して伝えている。	外国の学校で仲良くなれるために、出身地、得意なこと、好きなもの、誕生日、などを用いて工夫して伝えようとしている。

3 指導と評価計画（全7時間）

単元のゴール「転校した外国の学校で仲良くなれる自己紹介ができるようになるろう」

時	めあて	主な学習活動	評価規準	教師の見取り
1	出身地や得意なことを聞き取ろう！	<ul style="list-style-type: none"> 単元のゴール設定 チャレンジカード・チャレンジトークの説明 授業の進め方の確認 	聞く 知・技 (形) 主体的 (形)	<ul style="list-style-type: none"> 単元のゴールが分かる 出身地や得意なことを英語で聞くことができる
2	出身地や得意なことを英語で言ってみよう！	<ul style="list-style-type: none"> 単元のゴール確認 (デモンストレーション) めあての確認 (デモンストレーション) チャレンジトーク (自分の名前を伝えよう) 聞くことに慣れ親しませる活動 	聞く 知・技 (形) 主体的 (形)	<ul style="list-style-type: none"> 出身地や得意なことを英語で聞くことができる 自分の名前を英語で伝えることができる
3	好きなものを英語で聞き取ろう	<ul style="list-style-type: none"> 単元のゴール確認 めあての確認 (デモンストレーション) チャレンジトーク (名前と誕生日を伝えよう) 聞くことに慣れ親しませる活動 既習の英語表現を発表する活動 	聞く 知・技 (形) 主体的 (形)	<ul style="list-style-type: none"> 好きなものを英語で聞くことができる 出身地や得意なこと、名前、誕生日を英語で伝えることができる
4	好きなものを言ってみよう	<ul style="list-style-type: none"> 単元のゴール確認 めあての確認 (デモンストレーション) チャレンジトーク (出身地を伝えよう) 聞くことに慣れ親しむ活動 既習の英語表現を発表する活動 ※児童の実態に応じて変更した。 	聞く 知・技 (形) 主体的 (形) 話す【やりとり】 知・技 (形) 主体的 (形)	<ul style="list-style-type: none"> 好きなものを英語で聞くことができる 出身地や得意なこと、誕生日、好きなことを英語で伝えることができる
5 本時	仲良くなれるように自己紹介の工夫をしよう	<ul style="list-style-type: none"> 単元のゴール確認 めあての確認 (デモンストレーション) チャレンジトーク (好きなことを伝えよう) 自己紹介の工夫をしよう ペアで既習の英語表現を伝え合う活動 	話す【発表】 思・判・表 (形) 主体的 (形)	<ul style="list-style-type: none"> 本単元の英語表現を聞くことができる 本単元の英語表現を伝えることができる 相手意識を持っている
6	転校した外国の学校で仲良くなれる自己紹介ができるようになるろう	<ul style="list-style-type: none"> 単元のゴール確認 (デモンストレーション) チャレンジトーク (好きなことを伝えよう) 既習の英語表現を使って、工夫して自己紹介をしよう 	話す【発表】 知・技 (総) 思・判・表 (総) 主体的 (総)	<ul style="list-style-type: none"> 本単元の英語表現が聞き取れる 相手意識を持って自己紹介ができる。

7	学習を振り返り、 まとめよう	・単元まとめテスト ・単元の振り返り ・学んだことをどう活用するか	知・技〈総〉 聞く	・本単元で学んだこ とをどのような場 面で活用しようと しているか
---	-------------------	---	--------------	--

4 授業仮説

①導入やまとめの場において、単元のゴールをもとに見通し、振り返りを行えば、児童は必要な英語表現を自ら身に付けようとする主体的な態度がみられるであろう。

②展開の場において、チャレンジトークにより慣れ親しんだ英語表現を用いれば主体的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の姿がみられるであろう。

5 本時の展開【5/7】

	学習活動	指導上の留意点 ○教師の手立て □予想される児童の反応	評価項目 (方法)
導入	1 単元のゴール確認 2 Greetig (3分) 3 チャレンジトーク ・(好きなことを伝えよう) 4 Today's goal 仲良くなれる自己紹介の工夫をしよう。	○単元のゴールを意識させる。 ○既習の英語表現を交えて、自分の好きなことを伝えさせる。 ○デモンストレーションからどんな工夫ができるか考えさせる。	
展開	5 【L&D】 p16 (3分) 「自己紹介を聞いて出身地と誕生日を書こう」 6 【Activity】 「なかよくなれるような自己紹介の工夫をしよう」 (3分) 	※活動の際には児童の距離感に十分に配慮させる ○グループで学び合いを促し、豊富なやりとりの中で英語に対する主体性の芽生えを仕組む ○動画を見て相手意識を持った自己紹介の工夫について確認させる(イラストや表情, ジェスチャー, 既習の英語表現など) ○英語表現に慣れ親しんだ児童に発表を行わせ、工夫について考えさせる。	「話すこと [発表]」 思・半・表《形》 主体的《形》 外国の学校で仲良くなれるために、出身地、得意なこと、好きなもの、誕生日、その国でやりたいことなどを用いて工夫して伝えようとしている。
まとめ	7 振り返り ・「見通し・振り返りカード」	○単元のゴールをもとに見通しを持たせて学習を振り返らせ、必要な英語表現や工夫について考えさせる。	

VII 結果と考察

1 作業仮説(1)の検証

単元計画において、単元のゴール設定をもとに毎時間の見通しと振り返りを行えば、児童は単元に目的意識や見通しを持ち主体的に学習に取り組む児童の育成につながるであろう。

【結果】

本単元では、「転校した学校で仲良くなれる自己紹介ができるようになろう」を単元のゴールとして設定した。第1時にゴールのイメージを持たせるため教師によるデモンストレーションを行い、単元における目的意識や見通しを児童に持たせた。単元のゴール設定を行うことで、児童は毎時間の目的や活動内容が明確になり、見通し・振り返りカードの中でも“自分ができること、自分に必要なこと”を視点に振り返りを書く児童が増えた(表2)。また、第1・2時の児童の実態

表2 児童の振り返り

から人前で英語を用いることに苦手意識を持っている児童が多く見られたため、単元のゴールである

“自己紹介”に向け第3・4時に人前で英語を用いて話す活動を多く取り入れた。その結果、発表に対する抵抗が弱まり、第6時の自己紹介では、英語表現

第2時: 自己紹介が聞けたので今度は自己紹介で自分の得意なことを言いたい。(児童R)
第3時: 今日、発表ができたけど緊張してはっきり言えなかったので発表を多くしたい。(児童S)
第5時: 次の自己紹介の発表では自分の趣味を伝えたい。(児童S)

や非言語(ジェスチャーや間等)を用いて自己紹介を行う姿が見られた。さらに、本時

「自己紹介の工夫をしよう」の感想でも、「次の自己紹介の時間には、自分の趣味を伝えたいと思います。なぜならその方が自分の趣味と同じ人たちと仲良くなれると思うからです。」と児童 S が答えた。これらのことから、児童は単元のゴール設定から見通しや他者意識を持ち、慣れ親しんだ英語を用いて主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとしたのではないかと感じた。また、アンケート結果（図 5）において授業前は「Unit（単元）の目的を意識して学習に取り組んでいますか」の問いに対して 33%の児童が単元の目的を意識せず授業に取り組んでいることがわかった。

今回の授業と Unit 2 を終えた後の同アンケート結果においては、82%が肯定的な回答をしており、児童が単元のゴールを意識し見通しや振り返りの方法について考え始めた姿がみられた。さらに、「外国の人が話しかけてきたらあなたはどうしますか」の問いに対して「英語で受け答えをする」と答えた児童が 16%上昇した。1 回目のアンケートの理由では「助けたいから、日本語だと困るから」など、相手を思いやる心情的な理由がみられたが、今回の結果では、「習った英語を出し切って案内する」や「できるだけ英語で伝え、分からないところはジェスチャーを使って受け答えする」など、学んだ英語を実生活の場においても活用しようとする児童の姿がアンケート結果からもみられた。さらに、単元のゴール設定と関連し、実践的に研究を進めていく中で気づいた“外国語に慣れ親しむ”重要性について、抽出児童の変容をもとに述べていく。

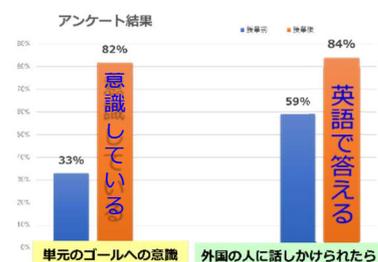


図 5 アンケート結果

単元のゴール設定を行い、授業を進めていくと事前のアンケートで「英語は難しい・苦手」と答えた児童が話や英語を聞かない状況が見られた。言語を学ぶ外国語科の授業では英語を聞くことがコミュニケーションの基礎を作る上で最も重要となる。しかし英語に苦手意識を持っている児童に単に英語を聞かせる、話しをさせることは苦手意識を増長させ、テーマに掲げる児童の育成を図ることは困難であると感じた。テーマ“主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成”を図るためには、研究の土台にもなる“外国語に慣れ親しんだ児童”の育成を図ることがやはり重要であると考えた。そこで、第 2 時に英語を聞くことの大切さや積み重ねについて母語である日本語を例に伝えた。さらに英語を聞かせたあと、「何が聞き取れた」と全体や個別に声かけを行い、聞き取れた英語を学級で共有し、聞き取れなかった英語は、グループ等で学び合いを行った。その結果、意識して英語を聞く児童の様子や学び合いの中で、間違えても大丈夫という雰囲気学級の中でつくられていく様子が見られた。このように、英語を聞くことに慣れ親しませ、安心して英語を聞く、話すことを繰り返す中で、徐々に英語に慣れ親しみ、英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の姿が単元を通して見られたと考える。（表 3）

表 3 抽出児童の変容

	児童の姿	教師のかかわり	児童の変容 (カード・インタビュー)
児童 A	<ul style="list-style-type: none"> 英語の授業は好きでも嫌いでもない、理由は分かるときと分からないときがある。 授業中よく眠る、英語を聞くことにも抵抗感がみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 聞くことに慣れ親しませ、児童ができることを認め、単元のゴールを意識させ、必要な英語表現に慣れ親しませた。 	<ul style="list-style-type: none"> 以前よりも英語が言えるようになった。 英語の授業が好きになった。

児童 K	<ul style="list-style-type: none"> 英語の授業はあまり好きではない、理由はもともと得意ではないからやる気が起こらない。 活発な児童だが、話を聞くことが苦手な様子がみられた。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童が今、できることを認め、単元のゴールに必要な英語表現に慣れ親しませた。 英語を聞いたあと何が聞き取れたと発話を促した。 	<ul style="list-style-type: none"> 前は英語が分からなかったが、最近の英語の授業が好きになった。
児童 N	<ul style="list-style-type: none"> 英語には興味はあるが授業は好きではない、英語は好きだが勉強が好きではないから。 分からないと諦め、授業を放棄する。 	<ul style="list-style-type: none"> 個別にかかわり、英語を何度も聞かせたあと、児童が今、できることを認め、単元のゴールを意識させ、必要な英語表現に慣れ親しませた。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分も英語を習っているから(勉強ができるようになった。)

【考察】

児童の実態や発達段階をもとに、単元のゴール設定を行うことは、児童が毎時間の見通しや振り返りを行う具体的な視点になり、必要な英語表現を自ら習得しようとする態度を育成するための有効な手立てだと考える。また、教師の視点からも、児童の実態把握をふまえた、指導内容の調整や児童に必要な手立てへとつなぐ授業改善の手立てにもなった。一方、今回単元のゴール設定を行い、毎時間見通しと振り返りを行ったが、外国語に慣れ親しんでいない児童にとっては、ゴールに対して目的意識が持てず、自ら英語表現を身に付けようとする手立てにはならなかった。そのため、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成を行うためには、英語に慣れ、そして親しませる児童の育成を行うことが重要であることが分かった。

2 作業仮説(2)の検証

Small talk の場において、学校や学校外で英語を用いてコミュニケーションを図るチャレンジトークの設定を図れば、児童は英語を用いた豊富なやりとりを体験することで、英語に慣れ親しむ児童の育成が図れるであろう。

【結果】

英語表現に児童が慣れるためのチャレンジトークを段階的に行った(表3)。本単元第1時にチャレンジカード(以下カード)とチャレンジトーク(以下トーク)の説明を行い、単元を進めた。今回の研究では、児童が主体的に取り組むことを期待し、宿題などの強制的な取り組みにはしなかったため、第2時に、カードに取り組んだ児童はわずか1名であった。しかし、「My name～」や「My birthday is～」が単元のゴールに結びつく練習になることや教師が、トークに取り組んだ児童を誉め、間違いを訂正せずに受容する環境づくりを行ったことで

表3 チャレンジカードの課題と取り組み人数

授業	チャレンジトークの課題	人数
第2時	①自分の名前を伝えよう	1名
第3時	②自分の誕生日を伝えよう	3名
第4時	③自分の出身地を伝えよう	7名
第5時	④自分の好きなことを伝えよう	9名
第6時	⑤自分の好きなことを伝えよう	14名

徐々に取り組む児童が増えた。また、発表者だけでなく、聞く側にも聞き取れたことを尋ねたり、「me too」等の返し言葉の使い方を伝えたり

表4 チャレンジトークの活動内容

第2時	第3時	第4時
T: New friend come in. C: My name is ○○. T: Good. T: どうだった? C: 緊張したけど楽しかった	T: New friend come in. C: <u>Hell!</u> C: My name is ○○. C: My birth day is ○○. T: 1月生まれはいないの? C: 1月生まれです! T: そこでme tooを使うんだよ	T: New friend come in. C: <u>Hell!</u> My name is ○○. C: My birth day is ○○. C: I'm from Fukuoka Japan. C: <u>Nice to meet you.</u> T: Good. Nice try. T: 出身地はどこだった? C: 神奈川県!

することで、会話に必要な英語表現にも慣れていく児童の姿がみられた(表4)。さらに、第5時「なかよくなれる自己紹介の工夫をしよう」では、トークに多く取り組んだ児童Sが非言語表現や未習の「I want to go～」を用いて、友達とコミュニケーション

ョンを行う様子がみられた（図6）。しかし、トークに取り組まなかった児童においては英語表現を“聞くこと”には慣れている様子がみられたが“話すこと”に抵抗がみられ、自己紹介の発表の場面で戸惑う姿がみられた。



図6 コミュニケーションを図る児童の様子

【考察】

チャレンジトークを通して、英語を用いるコミュニケーションの場を授業や授業外においても設定することで既習の英語や新出の英語表現に慣れ親しむ児童の姿がみられた。特に、話すことに対しての抵抗が薄まり、以前みられた“聞くことはできるが話すことが恥ずかしい”“日本語を用いてコミュニケーションを行う”等の児童の姿はみられなかった。また、発表者だけではなく、聞く側の児童に対しても聞き取れた英語表現を尋ねたり、反応の示し方を伝えたりすることで、会話に必要な英語表現にも慣れ、親しんでいく様子がみられた。一方でチャレンジトークには授業外での活動が含まれているため、クラスの半数近い児童が取り組まない・取り組めない実態がみられた。今後は教師による声かけや学年と共通した取り組みを行っていくことで、改善を図っていきたい。これらのことからチャレンジトークを通して繰り返し英語表現に慣れ親しませていくことは、テーマの土台である英語に慣れ親しむ児童の育成と外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童を育成するための有用な手立てであると考える。

Ⅷ 成果と課題

1 成果

- (1)単元のゴール設定を行うことで、児童は学習に目的や見通しを持ち、単元のゴールと自分の学習状況を比較することで、自ら必要な英語表現を習得しようとする主体的な態度を育むことができた。
- (2)チャレンジトークを設定することで、児童の英語を用いたやりとりが増え、英語に慣れ親しむ児童の育成につながった。

2 課題

- (1)単元のゴール設定を行い、毎時間の見通し・振り返りを行ったが、英語に慣れ親しんでいない児童にとっては、自ら英語表現を身に付けるための効果的な手立てにはならなかった。
- (2)チャレンジトークに授業外の活動が含まれているため、半数近い児童が取り組まない・取り組めない実態がみられた。声かけや取り組み方の工夫を行いたい。

《主な参考文献》

『小学校学習指導要領解説（平成29年告示）総則編』	文部科学省	開隆堂出版	2018
『小学校学習指導要領解説（平成29年告示）外国語活動・外国語編』	文部科学省	開隆堂出版	2018
『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』	文部科学省	旺文社	2017
『平成29年度版 小学校新学習指導要領ポイント総整理』	大城 賢	東洋出版社	2017
『学習指導要領の解説と展開 外国語活動編』	大城 賢・直山木綿子	教育出版	2008